

白状する。

本誌『EURO-NARRASIA Q』は、10号まで一すぶる一低調であった。もちろん一方が驚くくらいに熱狂的な読者はいてくださった。その支持のおかげで、本誌はなんとか命脈を保ってきた。そういう切ない状況が続いていた。

ところが、昨年度の11号から潮目が変わった。端的に言えば、「評判」が良くなったのである。内容への問い合わせや送ってほしいという希望が――さすがに「殺到」とまではいかないが、少なからず――寄せられるようになった。

理由は、明瞭だ。

「奈良」に軸足を置いたおかげである。

11号〜13号のテーマは「奈良の祈り」、14号は「奈良県立大学生の見た奈良」であった。いかにも「奈良らしい」シーンが前景化し、これが人目を惹いて、本誌の認知度、好感度ないし注目度が上がったのである。

かつて、マーケティングの世界が「AIDAの法則」に席巻された時代があった。現在はずっと定着したのか――飽きられたのか、陳腐化したのか――あまり耳にしないが、「Attention 注目→Interest 関心→Desire 欲求→Action 行動」という、一連の一般的消費(者)行動プロセスの頭文字をつないでモデル化したものだ。DとAの間に「M記憶を挟んで「AIDA」とする場合もある。それ以外の派生語も夥しく生み出された。私は20年以上も前に、大手広告代理店の知り合いから「酒を飲みながら――聞いたのだが、「あたりまえじゃないか」という思いと、「そううまくいくものか」という思いが交錯しただけだった。それでいて忘れなかったのは、別れた直後に、その知り合いが急逝したからである。どうやら、その夜の酒が過ぎたらしい。赤い蠟で封印したようなデザインのボトルを傾けながら、「ほら、隣の黒っぽい地味なより目を惹くだろう」、だからみんなこちららを選ぶのだと言い、「AIDA」を教えてくださいました。隣の地味な酒を飲み続ける私に「他人のアドバイスは聞いた方が良くぞ」と笑ったのが、最後に聞いた彼の言葉だったと思う。

『EURO-NARRASIA Q』11号の企画も、同じ酒瓶から生まれた。酒屋で目に付いて、つい手に取ってしまった。「AIDAの法則」によるものなのか、知り合いを思い出したのかは判然としない。無理にでも前者だと思っこととして、企画編集に反映させたのである。

今後の本誌も、この基本路線を維持しつつ、AIDAの最初の「A」をさらに続けて

特集 解説

「奈良らしさ」をビジュアルに表現して――いくべきかもしれない。あるいはテーマや内容を慎重にいくぶん絞って、「I」への移行を模索した方が良いのかもしれない。

それが誰もが考える「まっとう」な方法とは分かっていながら、本号では一気に「D」に跳躍することにした。この「D」とは、より多くの方々がこの雑誌を手にとってみたい／奈良に行つてみたい／奈良をもっと知りたいというDesire。欲求の「D」だが、もう一つの「D」がある。それは、本号及び12号表紙裏のコラムで記した、本誌創刊にあたってのDetermination 決意の「D」である。

もちろん、奈良のヒト・モノ・コトといった文化コンテンツは重要だ。それ故であろう、世にその種の情報は――時代的、アイテム面で多少の偏りが見られるが――満ち満ちている。非力な本誌が、同じようなコンセプトで屋上屋を重ねても、効果の高まりは期待できないように思われる。

何より、近頃の――中央も地方も、海外も国内も――世間の動きを見るに付け、「奈良」は列島の真ん中で「錘」のように「じっと」してはられない、そういう焦りをしきりに感じる。

もともと、本誌も前身の『NARRASIA Q』も――極言すれば――奈良の誇りは「思想」だと考えてきた。思想が基軸にあつてこそ、奈良の文化・文化財・風土・習俗・宗教等が成立している。あるいは、廃都から1200年以上経って、今なお首都の時代の「姿」を維持できている。その大事な思想が「かちかち」に固まって、だれもそれを「思想」とは気づかなくなっている。奈良の「思想」を――考えそのもの／考え方／考え人／考えを生んだ場所の各々に――解凍すること、これが日本最古の首都・奈良の歴史的・社会的責務であり、結果として奈良の情報発信につながる。そう考えてきた。

その初心に立ち返り、あらためて奈良に蒔かれて散らばっている思想や言葉を拾い集めていく取り組みをすすめていくことにした。

本号では、奈良県立大学ユーラシア研究センターでの研究会(近世・近代の思想研究会)の成果の一部を特集する。いずれも研究者からの寄稿によるもので、斬新なアンクルからのアプローチや隠れていた側面への注目、あるいは見過されてきたものへの「まなざし」が感じ取れる論考の選りすぐりである。

『奈良』という思想の醍醐味を、ご堪能ください。

(編集責任者 中島敬介)

附記…三号に一度ぐらいの割合で「A」、すなわち「奈良らしいシーン」の特集もしますので、こちらの方も「愛顧のほどよろしく願っています」。